夏の庭
—The Friends—

原作……湯本香樹実
『夏の庭 -The Friends-』(新潮文庫刊)

脚本・演出……印南貞人(東京芸術座)

Story

はじまりは、山下が学校を三日間休み、田舎のおばあさんの葬式に行った話を聞いてからだった。
人間が死んだら、どうなるんだろう。その疑問が日増しに募る一方の三人組。
河辺が近所に住むひとり暮らしのおじいさんが、「もうじき死ぬんじゃないか」ってことを聞きつけて来た。
それを機におじいさんの《死ぬ瞬間の観察》がはじまる。

その家はまるで手入れされてなかった。ゴミ袋なんかが、家の周りをずらりと囲んでいる。
「ちぇっ、生きてる！」「おまえなぁ」「わかってるよ。張り込みは忍耐と努力！」
「なんの変化もない、まったく生きる意欲ってものを感じない。」

ある日、見張っているところをおじいさんに咎められる。

おじいさん　「おまえら、よくうろうろしてるな。何しようってんだ。」
木山　　「別に……ただ……」
おじいさん　「ただ？」

木山　　……なんで「ただ」なんて言っちゃったんだろう。
　　ぼくたち、ただあなたの死ぬのを見張ってるだけです。なんてまさか言えないし……

——— 少年たちの夏が始まる ———

Staff

美術……幡野　寛（東京芸術座）
照明……矢口雅敏（ライティングオフィス矢口）
音楽……川本　哲（フリー）
効果……馬上真勝（東京芸術座）
衣裳……山田靖子（フリー）
表紙画……渡邉良重（(株) キギ art director）
舞台監督……たかのきよこ（東京芸術座）

Characters

おじいさん
笹岡洋介

木山
大橋純子

山下
安田カオル

河辺
齋藤　彩

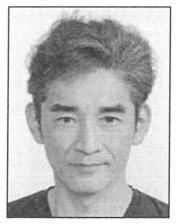
杉田
平田正治

木山の母
浅利倫映

木山の父
小川拓郎

種屋のおばあさん
古香弥生
相沢ケイ子

医師
星野子熊


ホーム長
前田剛志

介護士／看護士
上野山達宣

Message

原作／湯本香樹実

『夏の庭』が最初に出版されたのが一九九二年のことだから、二〇年前になる。この二〇年のあいだに、すごくいろいろなことがあった。景気も気候も異様に変動が激しくなった。先が読めない不安が世界中を覆っているが、それは、たとえば六〇年代・七〇年代に、自由の道連れと考えることのできた不安とは質が違うのではないかと思う。もっと正体が見えなくて暴力的なもの。世の中の仕組みも自由のあり方も、より複雑で広範になり、個人と社会の遠近感のなかに「近いようで疎外されている感じ」という気分が充満している。その反動として、小さな安心を求める心理だけがますます強まってしまった。生きているかぎり安心なんてあり得ないのに。

自分の身の回りにもいろいろな変化があった。この二〇年の間に何人かの人が亡くなり、二〇年前にはいなかった人が何人か生まれた。様々なものが去来したが、そのたびに心に何かが積もり、二〇年の間には山となった。人は誰しも心のなかにいろいろなものを積もらせてしまうから、もし不死の人がいたらそれはどんなに苦しいだろうということにも思いが及ぶようになった。心にたまったものから自由になる、という死のとらえ方を、だんだん身近に感じるようになってきたのだ。

でも、願うことなら、その堆積した「何か」を自分は文章に表したい。いつもこの自分のなかには、もうちょっと「いいもの」を書きたいという願いがあるが、それは一生かけても埋まらない穴を神様にあてがわれたようなものだ。お金がないとか、時間が間に合わないとか、体力がついていかないとか、常に何らかの不足に悩んでいる自分だけれど、「いつか穴が埋まってすることがなくなったら」とか「飽きが来て穴を埋める気がしなくなったら」という心配だけはしないで今までやってこられた。これはわりと大事なことだと思っている。

『夏の庭』の木山が「生きているっていうのはただ息をしているというだけじゃない」と思うところがあるが、その思いはこの二〇年の間、いろいろな人の生き死にに関わったことで私のなかでよりいっそう強まった。人間が生きていくうえで、いちばんその命を疎外するもの、それは虚しさだ。どんなに財力や能力があっても、虚しさにやられてしまったらおしまいだ。逆に言えば、虚しくなければ人はどんなときでも、かなり大丈夫らしい。不景気や災害といった外的な問題は深刻だし、そういったことが虚しさの引き金になることは多々ある。が、虚しさは根本的なところで自分と向き合うしかない問題だ。そして自分と向き合うには、他者と関わることによって得られるある種の鏡が必要でもある。『夏の庭』の木山に河辺や山下がいたように。あるいはあの老人がいたように。

人間は大昔から様々な災厄に見舞われながらも生き延びてきた。それは人類全員がひとり残らず虚しくなってしまう、という事態にはまだ一度も陥っていない何よりの証拠だ。いつもどこかで、誰かしらが誰かしらと関わりながら、明日のために何かしようとしている。今、この瞬間にも。私も自分に与えられた穴を埋める努力を、ひっそり続けようと思う。荒れ地に花の種を蒔く人の姿を、心に抱きながら。

(2012 年 3 月公演パンフレットより)

東京芸術座
〒177-0042　東京都練馬区下石神井 4-19-11
TEL：03-3997-4341　FAX：03-3904-0151　Mail：tg@tg-za.com